

< 書 評 >

内戦ならぬ内戦：歴史的な神話を粉砕する レオナルド・M・スクラッグズ (ユニバーサル・メディア 2111)

評者：タダシ・ハマ

(日本語訳：「史実を世界に発信する会」)

米国の歴史上、生命と財産の損失という点で、一番悲惨な紛争と言え、いわゆる南北戦争にとどめを刺すだろう。しかしこの南北戦争は学校の歴史の授業ではいい加減にしか教えられていない。学校を出てからも、満身に触れる機会はない。著者レオナルド・スクラッグズは、米国の「南北戦争」は実は内戦ではなかったと指摘する。——南部諸州はその政治的な意志をワシントンに押し付けようとは思っていなかった。むしろ、南部はワシントン DC の米国政府から離脱する方策を探っていたのである。北部の人々にとっては、北部の企業の利益を守り、北部の共和派のラディカルな主張を通すことだけが至上命令だった。その絶対条件に南部が逆らったことが許せなかったのである。北部から見れば、南北戦争は「南部の独立を妨げるための戦争」だった。「奴隷を解放しようという崇高な使命を持った十字軍」ではなかった。

南北戦争という名の内戦は、アブラハム・リンカンがアフリカからの奴隷を解放するために南部に挑んだ戦いだったということになっているが、とんでもない誤解である。スクラッグズは、奴隷制度の廃止がこの戦争の論点ではなかった、と指摘する——奴隷制度の廃止しようというのは、一部の過激な廃止論者だけの主張に過ぎなかった。南北が交戦状態に入るきっかけを作ったのは、北部の共和派がその政治的経済的意思を強引に南部に押し付けようとしていたことだった。

従来の解釈によると、南部の分離主義者は奴隷制度を維持するために戦ったということになっている。ところが、実は、当時の南部では、奴隷制度から利益を得ていた人々は極めて少数だったのである。スクラッグズによると、当時南部で奴隷を所有していた所帯は26%だった。そして、この数値は南部連合軍の兵士に限ると20%だった。さらに、奴隷所有者のホンネは、経済的に極端な損害を生ずるのでなければ、奴隷制度廃止には喜んで賛成するという所だった。南部の経済は農業と輸出に依存しており、それが低廉な輸入奴隷と絡み合っていたからである。現に、南部の、木綿 (or 綿花) を含む農業製品の輸出は、「1860年代の米国の最大の稼ぎ頭」となっていた。1861年よりもずっと以前から、奴隷所有者への補償を前提として、奴隷を段階的に解放して行こうという声は高くなっていった。ところが、過激な奴隷制度廃止論者は、共和派の支持を得て、すべての黒人奴隷をすぐに解放したいと考えていた。黒人奴隷が解放されたならば、その後は、教育も職もない黒人が野放しになる。どんな事態が出来るか。その間に、共和派はきちんと答えることができなかった。

リンカーン大統領は、黒人奴隷を解放したらその後は、アフリカに送還するか、米国中部の開拓のために植民として送るかを考えていた。黒人と白人が共存して暮らすなどとは夢にも考えていなかった。スクラッグズはそう指摘する。そう考えていたのはリンカーンだけではなかった。インディアナ、オハイオ、オレゴン、ミシガンなどの北部諸州は、黒人を白人社会に迎え入れないと明確に規定する法を制定した。北部諸州にはずっと以前から、白人と黒人の通婚を禁ずる法が存在していた。リンカーンはイリノイ州議会議員だった時に、黒人が「イリノイ自由州」（訳者注：「自由州」とは南北戦争以前から、奴隷制を禁止していた州のこと）へ入ることを禁止する法案に全面的に賛成した。

「南北戦争」という名の内戦が勃発する以前から、奴隷制は論議的になっていたのだろうか。リンカーンは大統領選挙の最中には、奴隷制が認められている州ではこれを存置し、西部の開拓地ではこれを禁止するという主張をしていた。修正憲法（スクラッグズは憲法修正第十三条と呼ぶ）は、連邦議会が州の奴隷制度に介入することを禁じている。この修正案は1861年2月28日に下院で、さらに同年3月2日に上院で可決された。この時期にこの修正案を成立させたのは、「南部諸州が連邦から離脱しようという動きを見せていたので、宥和を図るためだった。すなわち、今後これ以上、連邦議会や連邦政府が合衆国の奴隷制度に介入する懸念はないということを保証するものであった。」

この当時、奴隷制度をめぐる内戦が勃発するなど予測できた人が一人でもいただろうか。1861年4月12日に戦端が開かれた後、リンカーン大統領は各州知事に対して、「南部の反乱を鎮圧する」ために、75000人の軍を投入する命令下したのだった。1861年7月22日の上下両院合同決議は、「この戦いは、南部連盟諸州の権利や既存の制度を転覆させたり、これに介入したりすることを目的とするものではない。ただ、連邦を維持せんがための戦いなのである」と宣言した。現実には、「北部は、南部の解放奴隷が北部に流入して来ることを恐れていた」のだった。1861年には、カール・マルクスでさえ、この戦争の目的をよくよく理解していたとスクラッグズは指摘する。「北部と南部の戦争は関税戦争に過ぎない。それ以外の大義名分があるわけではない。奴隷制度とは何のかかわりもない。ひたすら北部の人々の権力欲から出たものである」とマルクスは述べた。リンカーン自ら1861年に、奴隷制廃止論者のホレス・グリーリーに向かって、自分の第一の目標は、「連邦を救うことである」と述べた。「奴隷解放をしないで連邦を救う手立てがあるのならば、私はそれを選ぶ」とまで言ったのである。

南北対立の根源は、奴隷制度ではなく、北部が厳しい関税を押し付けたことにあるとスクラッグズは言う。南部の経済を壊滅させるほどの関税だったのだ。当時の連邦政府の歳入は関税に依存していた。南部は輸出によって経済的に有利な立場に立ち、北部を圧倒していた。ところがその一方で、工業製品については、南部は北部とヨーロッパに全面的に依存していたのだった。関税を制定したのは

北部で、南部の反対を押し切って強行したのだった。これによって、政府の歳入は増加し、かつまた、北部の工業が外国との競争から守られることになった。そればかりではなかった。関税からの歳入で利益を得たのは北部ばかりだった。「こういう税収の80%以上が北部の公共事業や産業補助金へと回された」とスクラッグズは指摘する。

19世紀前半には、外国からの輸入品にかけられた関税は、下は15%から上は50%までという幅のあるものだった。そして、これがために「無効化の危機」が出来た。サウスカロライナ州では州議会が召集された。議会は、この関税が不公正かつ違憲であるとして無効を宣言したのである。武力紛争に発展しようになったが、妥協が成立して回避され、関税は一律15%に引き下げられた。

結党間もない共和党は、歴史的な視点を欠いていたせいか、保護貿易政策に走り、関税引き上げを綱領の中心に掲げていた。1860年、共和党が多数を占めていた連邦議会は、関税法を可決した。これを推進したのは、バーモント州選出の共和党下院議員ジャスティン・モリル。この関税法は関税を15%から37%に引き上げるものであり、三年後にはさらに47%にまで増額された。1860年の大統領選挙では、リンカーン候補はこのモリル関税を支持した。南部の人々は、連邦政府と北部の企業が結託し、南部を犠牲にして大儲けをしようとしていると考えた。どう見ても、この関税法は合衆国憲法の精神に背馳していた。憲法は「連邦議会は、つぎの権限を有する。合衆国の債務を弁済し、共同の防衛および一般の福祉に備えるために、租税、関税、輸入税および消費税を賦課し、徴収する権限。但し、すべての関税、輸入税および消費税は、合衆国全土で均一でなければならない」と規定している。

上院がモリル関税法を可決したのは1861年3月2日のことだった。この時まで、南部七州が連邦から離脱していた——連邦にとどまった南部諸州も結束して反対票を投じた。ジェームズ・ブキャナン大統領は法案に署名し、リンカーン次期大統領は、「本法を連邦から離脱する南部諸州にも施行する」と宣言した。

スクラッグズはこの内戦のある副産物に注目する。あまり知られていないが、極めて危険な副産物である。それは、ユニオン・リーグ (Union League of America) が抬頭して来たことだった。ユニオン・リーグは「ロイヤルティ・リーグ (Loyalty League)」とも呼ばれる。緒戦で南部連盟が優勢になり、北部でも民主党に同調する動きが出て来ていたので、これに対抗するために、1862年に結成されたのだった。当初、ユニオン・リーグの目標は、「内戦と軍隊と共和党を支持する」ことだった。戦争末期になると、南部諸州の連邦主義者たちがユニオン・リーグの支部を結成した。こういう南部のグループのリーダーシップは、次第に北部の「カーペットバッガー」(南部で一旗揚げようとする北部出身の渡り政治家)や北軍の将校たちに牛耳られるようになった。会員になる資格は、内戦前まで奴隷だった者、もしくは北軍の黒人兵士にほぼ限られていた。

現に、以前の南部連盟諸州の知事になったカーペットバッガーたちは、「再建」の時期には、権力を維持するために、ユニオン・リーグを「黒人民兵」として利用した。南部のユニオン・リーグの目標は、黒人に選挙権を与え、共和党に投票させることだった。新たに解放された黒人奴隷は、多くの旧南部連盟諸州で、有権者の相当部分を占めるようになった。少ないテネシー州でも全有権者の25%を占め、サウスカロライナでは60%に達した。¹ ユニオン・リーグはリンチを含めたテロに訴えた。対象は黒人で、「正しい」投票をさせるためという理窟だった。また、ユニオン・リーグは共和党の民兵という特権を得たために、その立場を利用して、南部の白人に対して復讐を行った。復讐は、略奪から放火・殺人へ及んだ。²

いわゆる南北戦争（米国の内戦）について、スクラッグズは歴史的に興味深い厳然たる事実を他にも紹介している。まず誰もが不思議に思わなければならないのは、すぐに分かる真っ赤な嘘が、なにゆえに歴史の真実として幅を利かせ、不愉快な事実は真実であっても、なにゆえに丹念に排除されてしまうのかということである。その挙句、一見聡明な米国人が、歪んだ歴史観に取りつかれてしまっている。迫害されたと主張する人種的マイノリティの政治的経済的要求に唯々諾々と屈服してしまうとは、なんとという情けないことであろうか。なんと、米国人は今、社会全体の協調を図るという名分の前に、自分たちの権利も尊厳も放棄してしまおうとしている。真実が歪曲されても、南部連盟の兵士の名誉が悪意ある中傷によって傷つけられても、社会の平和を維持するためには甘受するしか仕方がないという人々が、南部にも存在している。³ 自虐史観とは恐ろしいものである。そして、こういう考え方に染まってしまったのが、米国人だけではないことにも注意しなければならないだろう。

¹ https://faculty.weber.edu/kmackay/statistics_on_slavery.htm

² ハイチやジンバブエが独立した後で、多数派の黒人が少数派の白人に、「土地改革」の名目で、どのような暴力を揮ったかを思い出して欲しい。 <https://www.newsweek.com/zimbabwe-president-robert-mugabe-white-farmers-651326>

³ “AEI Political Report: Polls on Political Correctness,” <https://www.aei.org/wp-content/uploads/2017/05/Political-Report-June-2017.pdf?x91208>